

[書 評]

『啓蒙の運命』

(富永茂樹編, 名古屋大学出版会, 2011年)

森 元 庸 介

(東京大学教務補佐員)

論集というものは、その成立の事情について明言しにくい懐疑の念を呼び起こすのがほとんど常であるけれども、ここで『啓蒙の運命』という表題のもとに束ねられた論攷は、扱う対象と領域の多様さにおいて、と同時に、共通する緻密さと透徹ぶりにおいてひとつの範を示し、この形式が選択されたことを必然へと高めている。

共通しているもの、それはしかしまたひとつの視角なのでもあり、その視角に浮かぶ啓蒙の運命は決して朗らかなものでない。ページを繰って改めて思い知るのは、蒙を啓こうとする営為にたゆまず降り掛かる逸脱への圧力(あるいは誘惑)の執拗さであり、目指されたのとは真逆でさえあったかもしれぬさまじまの帰結が明らかとなって、たどられた道行きの困難を浮き彫りにする。といて、論者たちはいたずらな詠嘆にならずにいるのはもちろんない。啓蒙がもっぱら挫折を運命づけられた試みであるかに見えるとしても、挫折を言うには歩み通されるべき(であった)道筋を想定しなければならず、しかし、そのような想定がそもそも啓蒙の理念とつきづきしいものであるのかという問いの意識こそが、本書のたしかな立脚点として共有されているように思われるのだ。

実際、カントが掲げた「敢えて知れ (sa-

pere aude)」という銘に就くなら、啓蒙はプログラムの対極に置かれるべき何かだ。典拠とされたホラティウスは、この命法につづけて「始めよ (incipe)」と言葉を重ねている。そして、始めぬ者は、渡るべき川を前にその流れの途絶えを待つ田夫のようなものだ、とも(『書翰詩』1・2・40-44)。啓蒙は、だから、ともあれ始めることである。何を始めるべきなのかといえば、理性を公約に用いることであり、公的であるとはひとえに自由に語ることだという。吉田論文が精緻に跡づけるごとく、たとえば結婚制度をめぐる法の分節に関係した(枢要であるにしても)技術上の問題に帰着したかもしれない問いは、哲学者によって一挙に抽象化され、それと同時に、未決の運命へ身を委ねることへの甘美でさえある急き立てをともなうのもあった。

啓蒙がこうして文字どおりに企みのない冒険なのだとすれば、その道行きが波乱に富んだものとなるのは道理である。古代ギリシアにフーコーが汲んだパレーシア概念をつうじて市田論文が示唆するように、真理そのものを語るのではなく己が真理と信ずるものを臆せず語ることに当為が定められるとき、翻って真理は、さまざまな憶見のあいだで取り交わされる、すぐれて係争的な対象とならざるを得ないのだから。「敢えて知れ」は、ひと

つの信に真理を委ねることを否み、それによって真をめぐる無数の信の並存、あるいは相剋への道筋を開く。トクヴィルはそれを、平等原理の論理的な、だから不安を掻き立てずにはない帰結として望見し（富永論文）、アーノルドは、教養の理念を大義として奉じながら、いつしかそこに「個人主義の無間地獄」を看取して身を翻す（小田川論文）。プログラムなき投企がただひとつプログラムしたのは、そのような差異の全面化であるかもしれず、この帰趨へのまさしく反動として、秩序の再確立という公準が「宗教」という術語を中心に結晶化する。ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエール、ロベスピエール、コントに即して、啓蒙につきまとう宗教の影を跡づける増田、上田、北垣論文が巧まらずして構成した系を追ってみよう。発明されねばならない神（ヴォルテール）に本来の神格が具わるはずもなく、それは端的にひとつの機構の別称である。啓蒙の掉尾に位置する思想家にとって宗教は社会道徳一般へ限りなく接近しており、調和と調節を旨とする実証主義者は、それを知性による認識とも背馳しない純然たる制度として構想した。神性が此岸へ降下して人性に回収される過程が、ひとつの可能性として描き出される。だが、可能性を現実化する試みとしての「最高〈存在〉の式典」が破綻のうちで上演したのは、むしろ「精神の絶対化」という重苦しい「喜劇」なのであった。

式典開催を呼びかけるロベスピエールは、必要なる仮構という政治概念にその正統性の根拠を求めた。統治のための瞞着は是か非か。古典古代に由来して「優しい嘘」と呼び慣わされるこの問いかけは、カントを含めた啓蒙思想にとってのトポスでもあったが、久保論文は、ベンサム思想に添いながら、その逢着する地点のひとつを説き明かす。外部に措定された——つまりは偽の——真理ではなく、有用性こそが言語を基礎づける局面を描き出した功利主義者は、同時に、価値の源泉を個別的な言語使用へ還元することで、

「ことばの戦争」の時代を開いた。この「戦争」の必然である所以は、斎藤論文が（吉田論文によって論集の劈頭で導き入れられもした）ダランベールとフリードリヒ2世の対話を分析しつつ、別の見地から確認させてくれる。いみじくも民衆に対する瞞着の是非をめぐる議論は、論者ふたりがそれぞれ期せずして相手の主張を己のものとして主張する不思議な結末を迎えたが、それは同時に、了解への志向がコミュニケーション行為に逆説的かつ運命的なしかたでもたらず不透明性を証言しているのだった。

討議は同意に至らず、むしろ差異の並存を確認させ、あるいはいっそう強化しさえする。だが、こうした認識それ自体の共有をつうじて差異が収束へ近づく局面もあることは、桑瀬論文が、立法のアポリアをめぐるジョゼフ・ド・メーストルとルソーの対応をつうじて明らかにしている。国家の正統性をめぐる呵責なき検証作業は、創設的行為としての立法を語るに及んで超=歴史的な形象（たとえばモーセ）を呼び求め、理性の不完全性から公論の不毛を嘲る批判者にあらかじめ得点を譲っている。だが、こうして問題化された一般意志と（それを具現するはずの）法の根源的な不一致に積極的な可能性を認める立場もあった。ネッケルによって財政上の方便として持ち出された「公論」は、デイドロにとって、安定した統一を反映するどころか、無数の私利が仮初めに示す調和に過ぎず、それが潜在させる分裂と紛争の可能性においてこそ有意である（王寺論文）。「ことばの戦争」はそこで明らかに内乱の形象をともなって勸奨され、「血の海のなかでの再生」が思惟のうちで夢見られる。

自由の対価として招来される混乱に身を開くにせよ閉ざすにせよ、そこには闇に沈んだ「理性の片側」（ロベスピエール）への意識がともなう。ではしかし、理性のもう一方の側を満たすという光は、そもそもどのような光なのか。確率論と統計学の発展が18世紀ブリ

テンで投資社会の成立に寄与する「改良」の過程を記述した坂本論文は、そうした学知と実践の幸福な結合の条件として、この学知が「合理的なものであるかぎり」と控えめに、けれども決定的に留保を加えている。あるいは問われるべきものはさらにその先にあるかもしれない。19世紀フランスの生命科学が生み落とした認識と生成の一致という「種子」は、20世紀の遺伝子工学のうちに、認識の必要をすらほとんど知らない純然たる結合術として「成体」した。過程を詳述する二篇の田中論文が示すのは、合理性が弁証法的に非合理性へ転形するという馴染み深い図式の手前で、合理性がただ合理性として貫徹されゆく様態とその帰結なのであって、そこには不安という契機を差し挟むことさえむずかしい。富永論文と北垣論文がそれぞれ論及するコンドルセの未来予測は抑えがたく笑いを誘うけれども、学知の現場(!)に目を向ければ、正しかったのは——機械の絶対的な安逸が、人間の人間であることの要を引き去ってもたらず無残を予見したヘーゲル（佐藤論文）とともに——やはりかれだったのではないかという思いが萌す。システムの全面化に対する批判的検証という手つかずの作業のヒントを、トマス・リードが架空の星イドメネアを舞台に構想した一種の空想譚に求めるのだとして（長尾論文）、自閉的に完成された知の相対性を映し出す鏡——「別の否定性」（佐藤論文）と呼び直すことは短絡だろうか——を人間世界の内部で仮構する、そうした必要な迂回のための猶予がなおどれほど残されているのか、心許ないのはたしかだ。

猶予を確保するためには、「敢えて知れ」と「有為たれ」の骨絡みを解く、いわば消極性の試みこそが求められているかもしれない。アドルノの音楽論は、室内楽という内密な形式が「生産」をその模倣としての「遊戯」へ

縮減するさまを描きながら、限定された社会性という未来を郷愁の相のもとに差し出す（岡田論文）。そうしたありうべき退隱の場の対蹠点では、ラカンが、快と善と幸福の想像的な結合——西欧の知的伝統に則するなら、それはまさに「使用 (uti)」の次元のことだ——こそが幸福を阻碍するのだと喝破し、この認識の苦痛と相即的に享受されるはずの別の幸福を「享楽」の名で言いつし示している。究極的な袋小路を招来するかに見える——飽かずその描写を繰り返したサドが現実にはそこへついに到達しなかったように——この選択がもたらす「道」を知るには、立木論文がみずから予告した次の論究を待つべきだろう。

それにしても、と川の畔で田夫はひとり呟くかもしれない——啓蒙の営みとは何という骨折りなのだろうか。始めることなく、いつしか訪れるはずの微睡みを待ちたいという思いが首をもたげる。だが、そうした期待もそれほど容易く購われるわけではない。ナチス・ドイツにおける農村空間の祭礼的な組織化を破格に鮮やかな筆致で描いた藤原論文は、啓かれぬ者であることが、啓かれぬ者になることへいつしか変換させられるプロセスを剔抉し、滞留がそれ自体ひとつの逆進の呼び水にほかならないことを告げ知らせる。

始めるべきであることを知りながら始めぬ者は、始めるべきこととは逆の何かをおそらくすでに始めてしまっている。留まろうとする傾きはやはり傾きなのであって、留まるべき場で真に留まるというのであれば、そのためにもまた己を啓かなければならない。ごく個人的な次元で受けた教えを書き添えるのは、後退りのうちで草した評文の末尾に、一読者がひとつの書物にたしかに負い得た認識のあることを、せめて証言しておきたいからである。